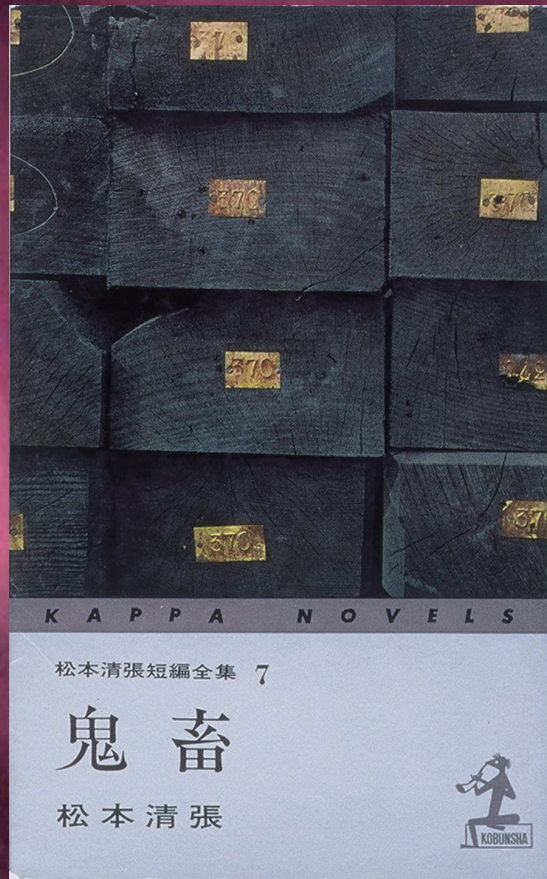


松本清張記念館

◆館報◆

2021.3
第65号

医者は死亡診断書をかいた。病み衰えたこの子の死に、
医者は疑問をもたぬようだった。宗吉は安心した。
「これで、あんたも一つ気が楽になったね」
とお梅は宗吉に云った。眼もとに微かな笑いを見せた。
近ごろ、滅多に無いことであった。



『松本清張短編全集 7 鬼畜』昭和39 (1964) 年
光文社カッパ・ノベルス
『鬼畜』は、『別冊文藝春秋』昭和32 (1957) 年4月号に掲載された。

現在入手しやすい本
『張込み 傑作短編集 5』新潮文庫、
松本清張全集36巻など

目次

記念館開館22周年記念講演会	2
企画展レポート	5
『松本清張研究』第22号発刊	5
展示品紹介	6
点描 作品の舞台を訪ねて	6
第22回松本清張研究奨励事業入選企画	7
友の会活動報告	7
トビックス	8

作品紹介

腕のいい職人の竹中宗吉は、小さな印刷所を経営している。しつかり者の妻・お梅の助けもあり、商売が順調に伸びていくなか、宗吉は仕事に使う料理屋で菊代という女を知る。「男好きのする」菊代に夢中となった宗吉は「細密な用心」で逢瀬を重ねていた。

八年後、印刷所が手詰まりになった宗吉夫婦のもとへ、三人の子を引き連れた菊代が乗りこむ。つりあがった眼を光らせ傲然とした態度のお梅と、なすすべなく頭を抱えるだけの宗吉に逆上した菊代は子を残し出奔する。途方に暮れる宗吉に、お梅の「これは、あんたの子かえ？」「似てないよ。」という冷たい声が響く。

最初は幼い末っ子だった。栄養失調で臥せっていた次男の顔に古毛布がかかったのは事故か故意か。次は長女。父との出かけに心弾ませる四つ子の娘は東京のデパートに置き去られる。子どもがひとり「片つく」ことに妻は昂ぶりをあらわにし、宗吉は重荷から解放されていく。「しかし、もう一人残っている！」——聡い長男をどう始末するか……。

小心で平凡な人間が鬼畜の所業に手を染めていくさまを短文の叙述で畳みかけ、数度にわたり映像化されている。野村芳太郎監督による映画版（一九七八年）では、「砂の器」で純良な警察官に扮した緒形拳が竹中宗吉を、岩下志麻がお梅を演じた。宗吉が経営する印刷所のリアルな描写には、松本清張自身が若いころ印刷工として働いた経験が活かされ、鮮やかな幕切れにつながっていく。

松本清張記念館
開館22周年記念講演会

「清張山脈を仰ぎ見る」

作家 塩田武士

令和2年11月28日(土)午後3時
男女共同参画センター・ムーブ
参加者190名

清張の「心理と実在のリアリズム」

皆さま、塩田でございます。今日は松本清張記念館開館22周年記念講演会にお呼びいただき、これほど光栄なことはありません。本当にうれしいです。



私は兵庫県の尼崎市、阪神工業地帯の下町で育ちました。父親は建設会社を営み、いわゆる中小企業の社長さんという感じでした。この父親は、三歳か四歳の

私を、カラオケ代の二百円を入れる係としてスナックに連れて行ったり、競艇場に連れて行ったり、少し変わった人でした。母親は非常に優しく、子どもを第一に考える親でした。そして、唯一の趣味が読書で、塩田家の本棚の本はほぼ松本清張でした。そして、清張ドラマがあるときには絶対に母親がチャンネル権をとって観る。それくらい清張好きな母親なので、子どもへの読み聞かせも松本清張でした。

例えば、『顔』という短編があります。ある舞台俳優がお付き合ひしていた女性を、旅行に行つて殺害する。途中で、被害者の知り合いの人に偶然会つてしまう。その後、東京に出て、舞台役者から映画に抜擢されて、どんどんどんどん売れていく。すると、あの唯一の目撃者が自分の顔を覚えていたかもしれない、という疑心暗鬼に駆られる。売れば売れるほど自分の顔が明らかになって、あのとときの男が思い出すんじゃないか。こういう疑心暗鬼を突く清張特有の短編です。途中まで読んで、母親が感想を言うんです。「たけちゃん、悪いことしたら返ってくるねんで」。過程が違っただけで、結局、童話と同じような結末になるので、そうやって松本清張で道徳を学んでいた。この「英才教育」は、八つ上の姉にも受け継がれています。

むかし、姉が遊園地で迷子になったことがありました。普通小さい女の子が迷子になったら、「お父さん、お母さん」と探すと思うんです。でも、姉はその瞬間、「もう人生終わった」

と思ったんですね。のちに姉に「何でそう思うたん？」と聞いたら、「松本清張の『鬼童』といっしょやねん」と。(会場笑い)『鬼童』もすごい短編です。愛人がいて、その間に子どもが三人いる。印刷業を営んでいたが、どんどん傾いていって、愛人の一家を養えなくなる。そしたら、愛人が乗り込んできて、子どもを置いて帰るわけですね。この子ども三人をどうするか。本妻はすごいきつい性格で「何とかしなさい」というわけですね。そしたら、ようこんなストーリー思いつくなど思うんです。けれども、四つの女の子に名前とか住所とか聞くんです。すると、うまく答えられない。答えられないから、親と娘二人で都会に行つて、デパートの屋上で「遊んどき」と言つてそのまま置き去りにして帰るんです。すごい筋ですよ。それから読み聞かせされてたんで、姉はこのストーリーを思い出したんです。「ああ『鬼童』や」(会場笑い)、『鬼童』と同じことが起こつてると、諦めて絶望して泣いてたそうなんです。

こういった形で、私は「英才教育」を受けて小説家になったわけですね。松本清張をずっと追いかけてきたのかとも思います。松本清張に、『実感的人生論』(中公文庫)というエッセイ集があります。私はこの本からすごくたくさんことを学んだんです。

例えば、この八頁にですね、清張は新聞記者になりたかったとあります。面接に行つたら、地方紙の社長さんは「私の学歴を聞いて失笑した。それから新聞記者になるには大学卒業の資格があつて優秀でなければならぬことを教えた。二十一歳であつた。私の大学卒業生への劣等感は決定的となつた」。ほかに印象に残っているのは二十三頁、「今になって考えると、母にはよそ行きの着物があつたことが生活上の大きな安定感になつていたのではないかと思う。つまり、どのように貧乏していても、いざというときは人並みの着物を着てつき合えるという心の張りである」。こういうせめてものプライドとか矜持というか、それを保つというところを清張少年は見えていたんですね。前半生四十年の苦勞があり人をよく見ていたからこそ、清張の心理描写はリアルで人の心をぐっと掴むのでしょう。もう一つは実在です。実際にあることだからこそフィクションにしたら面白い、ということ。『砂の器』は多くの

の作家に影響を与えた傑作です。私の『罪の声』もそうです。「方言周圏論」の展開には衝撃を受けました。昔は京都が都だったので、言葉が波紋を描くように広がっていったということがある。殺人事件の容疑者が東北弁で「カメダ」と言っていたから、最初その「ズーズー弁」がポイントになって、東北ばかり調べに行く。刑事が秋田の羽後亀田を見つけて行つたりするけども、全然手掛かりがつかめない。その後、国立国語研究所で、島根にズーズー弁に聞こえるような方言があることを教えられて、えつとなる。そして調べたら、亀嵩が出てくる。実際に日本にそういう地方があるというリアリズムが読者にぐっとくる。本浦秀夫が戸籍再製という手続きを利用して、和賀英良という人間に生まれ変わる。これも実際にある法的手続きで、現実にあるからこそ重みがあるんですよ。

例えば、私の大好きな短編で『一年半待て』という作品があります。保険外交員の女性が暴力をふるうような夫を殺害する話です。同情する余地がたくさんある殺人者であつたので、当時の婦人評論家の方々が声を上げて「確かに人を殺めたのは悪いことだが、よく見てほしい」と、堪えて、堪えて、堪えて、この犯行に至つたんだ」と訴え、執行猶予を勝ち取るわけなんです。ところが、ある日、旗振り役の女性評論家のところにある男が訪れて、少しずつ事実を確認していくわけです。すると、裁判を通して知つた犯行動機、その背景にある前提がだんだん揺らいでくる。この小出しにしていくな感じがものすごく惹きつけられるんです。最終的には、一回その判決が出たらもう一回裁判できませんという「一事不再理」、この法律の実在のシステムを見事に突くわけなんです。これも実在のリアリズムです。私は松本清張という作家が今もずっと読まれ続けるのは、やはり普遍性を獲得しているからだし、その根本には「心理と実在のリアリズム」があると思います。『点と線』以前のいわゆる探偵小説の中に、リアリズムをほんとに放り込んで、推理小説として人間を描いたところが決定的に大きかったと思います。そのような作品を読んで、私たちが後輩が清張に一步でも近づきたいと思つて、作家活動が続けたいって思っているわけなんです。

小説家になるまで

私は関西で生まれ育つたので、エンターテインメントが大好きでした。まず喜劇役者になりたくて劇団に入ります。高校生のときです。ある日、練習場の姿見で自分の姿をパッと見たら、周りはすごい華のある人ばかりで、自分は何て華の

ない人間なんだと思って、役者はダメだと止めました。こんどは漫才をしようと思って、『セクシオン34』というコンビを組みました。このときも高校生。ネタがすぐくしようもなく、すべり倒したんですね。多感な時期に、舞台上上がって笑い声が聞こえない状態で五分間漫才するって、けっこうな地獄なんですよ。帰りのバスの中で、相手と「そろそろ受験勉強しよか」と言っただけで解散になりました。

十九歳のときに、私は自動車の運転免許を取りに行きました。学科の授業の前に、早く着いたので教室の前で、藤原伊織さんの『テロリストのパラソル』という小説を読み始めました。江戸川乱歩賞という新人賞をとって、そのまま直木賞までとったという、伝説の作品です。あまりにも面白くて、気がついたら、授業が終わっていた。やっと見つけたと思った。あれだけ松本清張を読み聞かせされてたのに、灯台下暗しで、何でこの『小説』に気付かなかったのか。持ち運びができて、こんなに軽くて、自分のペースで楽しめる。自分が監督でのシーンも全部、自分で考えられて、妥協しなくて書ける。自分が求めていたのはこれだと思った。

十九歳のときに、最初に書いた推理小説はそれまで一回も出て来ない人間が犯人という「画期的な小説」でした。それを読んだときの友達の顔が忘れられないんですが、「おまえ、才能ないから止めとけ」と言われました。これが私のスタートでした。それから実際に賞を取るまで十二年、干支一回り、ずっと書いてました。何故書けないかと考えてみたら、やっぱり圧倒的無知、何も世の中のことを知らない、人脈もない。だから新聞社に入って勉強しよう、私は就職活動を新聞社一本にしぼることにしました。結局、地元の神戸新聞社に入社できて、十年間、記者を勤めて勉強し続けました。もちろん作家になるというのは内緒です。ですから、記者になった最初の取材から、私の「取材ノート」には目次が入っているんです。何々の取材、何月何日。こういう目次があったら、作家になったときに、「あの取材、面白かったな」と思ったら、一発で引ける。今もそのノートを見ることはありますが、字が汚すぎて読めない。

記者八年目、三十一歳のときに、将棋担当記者で得た知識を活かしまして、『盤上のアルファ』という、棋士を主人公にした小説を書きました。これが講談社の第五回「小説現代」長編新人賞をいただいて、やっとデビューできたわけです。

小説「罪の声」

九作目、いよいよもう後がなくなってきました。実は、デビューしたときに担当になった編集者は、「小説現代」の編集

集長をして塩見さんという人で、デビュー間もないころ、彼にあるアイデアを言ったんですね。「グリコ・森永事件」というのがあった。食品会社、製菓会社六社を「かい人21面相」という犯人グループが恐喝する事件。最初に社長を誘拐して、そのまま社長の会社を放火して、最終的には青酸ソーダ入りの毒菓子をばらまいていくといううな、一年五か月におよぶ大事件に発展していった。それが結局、未解決に終わったという劇場型犯罪なんです。調べれば調べるほど、なぜ未解決になったのかがまったく分からない。これほど証拠が残っていて、証人がたくさんいるのに何故だろうと思って、私は昔からこの事件に興味があったんですね。

「キツネ目の男」という容疑者がいる。この顔が当時、四歳、五歳の私には、本当に怖かった。そして、母親から「お菓子食べたらあかん」と言われた。そういうのが強烈に記憶に残っていたので、事件関連の本をよく読んでいた。だから、大学三年生のときに、この犯罪の変なところに気づいたんです。犯人たちは子どもの声を録音したテープを使うんです。受話器を取ると、いきなり録音した子どもの声の流れっていくわけです。当時、利用された子どもは三人いたのではないかとされていて、中学生ぐらいの女の子、それと小学校低学年ぐらいの男児、未就学児という三人。この未就学児と私は同世代で、同じ関西に生まれ育った。本でそれを知ったときに、パッと周りを見渡したんです。自分の人生の中で、この子どもとどこかですれ違っているかも知れん、と思った瞬間、この子どもは利用されたことを知ってたんやらか、とそういうことを考えだしたら、止まらなくなりました。この子どもたちの人生を書きたいと思ったのが二十一歳のときです。ただどう書いたらいいのかわからないので、ずっと温めていたわけです。

年月が経ち、小説家としてデビューし、満を持して、この子どもたちの人生を書きたいと塩見さんに話すわけです。これを



聞いたときに塩見さんは「それは面白い」と、「確かにすごい小説になる、ただ今の塩見さんの筆力では書けない」と言われたんですね。確かにそのとおりで「わかりました」と言ったら、「ただしこのネタは講談社のネタなんだ」と、「もう聞いた以上、講談社のネタなんだ」と「分かるね」と言われて、「はい」と、「ほかの出版社に言うたらいかんよ」と、出版社の厳しさを学んだわけです。（会場笑い）

売れない八作があつて、2014年の暮れ、塩見さんと、そのときの担当だった、現在「群像」の編集長をしている戸井さんという人、二人が私が住んでいる京都にまで来てくれて、「これまでの八作で塩田さんが人間を書くこと、エンターテインメントを書けるということはよく分かりました。この九作目から社会と対峙しなければならんんじゃないか。社会に向けて小説を書かなければならんのだと思う。預かってあるあれ、やりませんか」と、やっと言われたわけです。二十一歳から書きたいと思って当時はもう三十五歳、やっと書く時が来た、と思ったときに、私はすごく怖くなったんですね。まだ準備が足りない、まだ筆力が足りないんじゃないか、と思ったので「ごめんなさい、まだ書けないです」と断った。

そのあと私も迷うわけです。二か月後、もう一度、同じメンバーで来ました。彼らは週刊誌出身の編集者なので、事件に強い。そのときに、「人事異動でこの二人が異動になって、次誰かが担当になったときに、無理でしょ。やるって言わないですよ」と、「もうこの機を逃したらダメだよ」と言われたんです。二人の言うとおりで、よく考えたら、得てして準備ができたときにはチャンスって回ってこないよなあととも思い、チャンスは常に背伸びの状態で掴むものじゃないかなと思ったので、「分かりました、やります」と言ったわけです。そこから『罪の声』という作品が本格的に動き始めました。

すごく大変だったんですね。例えば、この事件をずうっと調べ続けている読売新聞の加藤さんという記者がいるんですね。七十歳を越えられて、今も取材してます。この方にどうしても話を聞きたくて、行ったら、もう膨大な量の資料があるわけですね。私も調べて、考えられる犯人の職種とか現場とか、独自資料を十種類以上作って、リアリティがあるかないか一つ一つ当てていったんですね。そしたら、加藤さんは一つ一つ「それはありえんな」とか、「それは考えられるで」とか言われる。そういう形で情報収集をどんどん続けていった。

『株式新聞』という新聞に、社長が誘拐される最初の事件

の二か月前に、その企業の株が上がっているという記事が実はあった。その記事に「ロンドンの外人買い」という言葉があったんですよ。そして、犯人の挑戦状の中に、やたらヨーロッパの都市が出てくる。新聞の「ロンドンの外人買い」という言葉と、これは関係あるんじゃないかと思って、話を聞く。すると「いや、これは黒目の外人買いや」、「黒目、つまり日本人だと、日本人が外国での売買に見せかけたものなんだ」と説明された。「当時は架空口座が作りたい放題だったので、スイス経由かもしれないが香港経由の、どちらかで足跡をほとんど消していくということをやったんだ」、「欧州筋の買いとは、当時、香港は英国領やろ、つまりイギリスやから欧州筋になるんや」とか、そういうことをどんどん聞いていって、小説にしていっていいのです。

この事件の本筋そのものも大変なんですけれども、こんどは登場人物が歩くところをロケハンしていかないとダメなんです。『罪の声』には二人、主人公がいて、一人は京都でテラーをしていて、この人がテラーの声の子どもが大人数になった人。もう一人は新聞記者で事件を改めて追うという設定です。この新聞記者が調査でロンドンに行く。それを書くために私もイギリスに取材に行くわけです。ロンドン、シェフィールド、ヨークという都市を一人でずうっと歩き回りました。

ヨークに着いてみると、外壁がすごい。昔の、中世のヨーロッパっていう感じの街並みがそのまま残っているんですよ。あつ、これだと思った。『罪の声』のクライマックスで、犯人が告白していくシーンに使えと思ったんです。どうやったらこの長丁場の一年五か月にわたった犯行を告白するっていうシーンを持たすことができるかとずっと考えていて、喫茶店で対面で座っては絶対不可能ですよ。しかしこれを、ヨークの街を二人横に並んで平行に歩いたらいいんだと思ったんですよ。平行に歩いたら告白する側が目線を合わせなくてもいいので、自分のペースで話せる。犯人は狡猾な人間だという設定なのです。相手がどれだけの情報を持っているか値踏みしながら歩くという設定にしたんです。これによってリアリティが担保された。

実際現場に行くと、地図を持ってずうっと歩いていくわけです。現場で、「ここら辺でいたいこのシーンのこれを言う」「みたいな所を地図に落とすいくんです。私はそのとき靴が悪くて、夜の八時ぐらいい、足が痛くてもう歩けなくなりました。公園のベンチに座って、夕焼けみたいな白夜の空を見てたときに、「ああ、本当に東の端から西の端まで来てし

まった」と思って、「ぼくはこれで完成させられなかったら、小説家としては本当にあかんのやろうな」と心から思ったんですよ。だから、何が何でも完成させる、了の字を打つぞと誓ったんです。そのときの決意は今も覚えていて、本当に自分の中で燃えるものがあつたんです。

そこから三か月ぐらいい小説を書ききるんですが、全編改稿になりました。さすがに怒りました。書き直しは信用している編集者三人に「それぞれ鉛筆(赤)を入れてもらう」、「それをみて改稿するかどうか判断してくださいませんか」と言われたんです。これは挑戦状だと分かったので受けました。

期限は二週間。届いた三部を読んでいったら、まあ的確な直しなんです。ここ要らないというのは本当に要らない。中継地のドバイの様子とか「これは紀行文ではないので、別の機会にどうぞ」とあるいは、笑いを取るシーンで「これって、面白いの？」と書かれていたりする。本当に痛いところを突いてくる。その間に、私、次女が生まれました。病院で次女をあやすんですけど、自分の子どものことよりテラーの子どものことをずうっと考えているわけですよ。それで、やつと三人が何を言わんとしているかという、共通項が分かった。前の原稿はあまりにも事件のインパクトが強いので、犯人捜しに引きずられていた。そうじゃなくて、利用された子ども、曽根俊也の気持ちや展開というのが足りない、それに加われば、もつと面白い小説になる、というのが三人の共通の意見だったのです。また二から組み替えて、四日で改稿しました。

午前三時ぐらいいに終わって、編集者にメールで送り付けて、もう疲れ切ってボケっとしてたらですね、それから二時間後ぐらい、午前五時ぐらいいに編集者から返信があつた。「これでいけます」と。つまり、午前三時に起きて、メールが着いたら二時間で読んで、すぐに「OKです」と返すということは、編集者の熱もすごいと思うんです。すごうれしくて、「ああ、自分はすべてやれることはやったな」と思えたんですよ。

八月に発売日を迎え、それから一週間後に、編集者から電話で「塩田さん、重版決まりました」、「一万部積みます」と伝えられた。その一週間後、「また二万部積みます」と。一万部は大変な重版です。このとき、やつと壁を越えたというのか、あ、壁って越えられるんだと思ったのでした。

映画『罪の声』

大阪の弁護士会館で撮影があつたときに、私は見学にお邪魔したんです。そのシーンはテラーで利用された子ども

のうち、地を這うような人生を生きてきた、聡一郎という子どもが今大人になって、新聞記者の阿久津とテラーの曽根俊也の前に現れて、これまでの人生を告白するという、もつとも重たいシーンなんです。この聡一郎役の宇野祥平さんという方は、もう見た瞬間、びっくりしましてね。げそつと痩せて、こんな分厚い眼鏡かけて、ちよつと汚れた靴をお履きになって、ひと目見ただけで私の想像していた聡一郎の一段上をいってたんですよ。うわー、聡一郎だと思って。その場もピンと張りつめて。役者つてすごいなあって思ったのは、同じセリフ、同じ告白シーンを角度を変えて何度も撮るんですよ。何度も泣いて何度も鼻水を流すわけなんです。そのとき、喜劇役者を目指してた十六歳の自分を想い出して、止めといてよかったなあと思つたんです。

聡一郎役の宇野祥平さんとは、映画がヒットして、大ヒット御礼会で再会しました。私が「十キロの減量はどうやって痩せられたんですか」と訊いたら、「運動しちゃダメだと思つたんです」と言われた。宇野さんは、実はオフアーが来る前に偶然『罪の声』を読んでらっしゃって、聡一郎役をやりたいと思つていらっしゃった。その描写が氣になつて仕方がなかつたらしいです。それで、本当に自分が話が来たので、「スポーツをやつて健康的に痩せては感じが出せない。つまり、食べないということでは痩せられないので、一か月かけて十キロ落としました」と言われたんですよ。もう、頭が下がるというのか、やつぱりプロつてすごいなあと思つて、勉強させていただきました。

この『罪の声』という映画を最初に私が観たのは、今年の夏です。東宝の試写室で観ました。テレビドラマ『盤上のアルファ』『歪んだ波紋』はあつたけれども、映画化は初めてでした。自分の初の映画化作品を観たら、やつぱり書いたときのことを思い出します。そのシーンが出てくる。特に主人公の阿久津、小栗旬さんが歩いている。ヨークの街は全部、私が歩いた所なんです。何年も前に、絶対に成功させるんだという追い詰められた気持ちで、ヨークの街を歩いていたこともすべて重なっていくんで、涙がばあつと出てくるわけなんです。本当に感謝の気持ちが入り込めてくるわけです。公開して全国の皆さんに観ていただけて、最後に「原作塩田武士」のクレジットを観たときに、ああ、あの一回も出て来ない人間が犯人だという小説を書いてた若造がここまで来たかあと思つて、すごい感慨深かつたのを覚えていてます。

光浦靖子さん手作りの「清張似顔絵ブローチ」を展示しました

企画展「直筆原稿で見る——『点と線』のダイナミズム（令和2年9月11日～令和3年1月11日開催）」会場内にタレントの光浦靖子さん手作りの「清張似顔絵ブローチ」を展示いたしました。その出来栄えに来場者の皆さんが感動し、笑顔になっていました。

女性芸人きっての読書家で、自作の俳句が歳時記に採録されたり、手芸本を出版するなど、その才能を多方面に発揮する光浦さん。思い出深い清張作品は「点と線」とのこと。高校生の時、先生が「点と線で、いいタイトルだろう？ 点が線になるって」としみじみ語っていて、読んでみようかなと思ったことが清張作品との出会いだったそうです。

※「ハンディ版オールカラー よくわかる俳句歳時記」（ナツメ社）



展示 令和2年12月11日から
令和3年1月11日まで

劇団前進座朗読劇「点と線」を実施しました



◆日時 令和2年11月3日（火・祝）18:00～

◆場所 門司赤煉瓦プレイス・赤煉瓦交流館
（北九州市門司区）

北九州市で開催中の『東アジア文化都市北九州』の事業として、また、企画展「直筆原稿で見る——『点と線』のダイナミズム」関連イベントとして実施しました。80名の皆さんが朗読劇「点と線」を堪能しました。

研究誌「松本清張研究」第二十二号発刊

特集 清張とジャーナリズム

対談

松本清張、横断する「作家」……池上彰・佐藤優
——フィクションとノンフィクションを超えて

論文

ジャーナリズムの視点から見た松本清張……保阪正康

『日本の黒い霧』における固有名の戦略……小森陽一

歴史の中のジャーナリスト松本清張……高橋敏夫

松本清張の同時代ジャーナリズム批判……高橋和夫

『小説帝銀事件』という試み……小田光雄

『白と黒の革命』が映す日本社会の中東観……東秀紀

松本清張と昭和円本時代……観光ミステリとしての『黒の回廊』……

再録

現代新聞論……桑原武夫・松本清張

——いま何を報道すべきか（対談）……松本清張

私感・戦後史——事件と報道操作……

エッセイ

松本清張先生と将棋……佐藤康光

心理と実在のリアリズム……塩田武士

小津安二郎の『点と線』……赤塚隆二

——鉄道を描いた両巨匠の同時代性……

記念館研究ノート

松本清張と女中もの文学……柳原暁子

——あるいはお手伝いさん、家政婦の視点……

木々高太郎からの葉書

清張が「西郷札」でデビューして今年でちょうど七〇年にあたる。今回紹介するのは、その昭和二六年に、木々高太郎から清張に送られた一葉の葉書である。

当時、九州・小倉で新聞社に勤務する松本清張が、作家・木々高太郎からこのような葉書を受け取ったのは、清張のある思い切った行動があった。清張は、「週刊朝日」の懸賞小説に入選した「西郷札」の掲載誌を、まだ面識もなかった木々に宛てて送ったのである。

順位としては三等の入選ながら、初めて書いた小説が雑誌に掲載されたことに勇気を得て、清張は木々だけでなく数名の作家に郵送したらしい。返信の中には大佛次郎の手紙もある。彼らはもちろん清張が愛読し尊敬していた作家だった。

木々高太郎は、探偵小説作家として活躍する一方で、大脳生理学^{はやしな}・林麟として慶應義塾大学医学部に勤務していた。「バヴロフの犬」で有名な「条件反射」学の第一人者として有名な医学博士である。専門である医学の知識を使った謎解きやトリックによる探偵小説が注目を浴びた。清張は、木々の「青色鞆膜」を読んだとき、私は乱歩の「心理試験」に劣らぬ読後感を得た。(注1)と書いている。さて、件のはがきを読んでみよう。

雑誌お送り下すつてありがたう

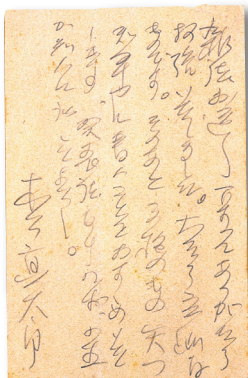
拝読いたしました。大そう立派なものです。そのあとこの種のもの矢つぎ早やに書くことをおすゝめいたします。発表誌なければ、小生が知人に話してよろし。

木々高太郎

これを受け取った清張も一部読めなかったらしく、(そのあと本格もの矢つぎ早やに書くことをおすゝめいたします)と解釈して(木々氏のいう「本格もの」とは推理小説の意味で、掲載誌に添えたわたしの木々氏への手紙は、このような小説でも推理小説になるでしようかときいたのである。)(注3)と書いている。

このような誤解(説?)がありながら、しかし、木々の計らいで「三田文学」に「或る小倉日記」伝が掲載され、清張は芥川賞を受賞する。木々高太郎は、清張にとつて間違いなくキーパーソンであった。

(学芸員 柳原曉子)



木々高太郎 松本清張宛はがき

1951(昭和26)年3月頃

注1 「日本の推理小説」(松本清張全集34「文藝春秋、一九七四年」)

注2 「松本清張と木々高太郎」(山梨県立文学館二〇〇二年)

注3 「西郷札」のころ(松本清張全集34「同」)

点描 作品の舞台を訪ねて 「表象詩人」① 紫川

「表象詩人」は昭和四七年七月から一一月に「週刊朝日」に連載された推理小説で昭和初期の小倉が舞台となっている。作品には清張が青春時代に東洋陶器に勤める文学好きの社員と交流した経験が色濃く反映されている。

小倉市で私鉄の駅員をしている「わたし」は、市内の陶器会社勤務する久間英太郎と秋島明治とともに、彼らの先輩である深田弘雄のもとへ通い、詩論を交わす文学仲間だった。

深田には東京出身の妻、明子がいた。わたしたちは、都会的な女性である明子に憧れの気持ちを抱く。

そのうち「わたし」は、明子が情熱的な久間と心惹かれ、久間も明子の好意に反応したのではないかと、秋島は二人の仲を知っているのではないかと考えるようになった。

わたしはそんなことを思案しながら橋を西に渡った。いつもだと橋を渡らずにそのまま紫川の東側土堤道を歩いて帰るのだが、頭の中が熱くなっているの、わざと寂しい西側土堤道を歩いたのである。

西側の道には川下の通称陸軍橋に出るまで人家がなかった。距離にして一キロ半ぐらいはあろうか。左手は陸軍兵器工廠^{りくぐん}の長い長々とした塀が、右手は土堤の斜面が川に向かってなだれ落ちており、そこには雑草が一面に生い繁っていた。対岸の東側は、陶器会社、製紙会社がつづき、ひとむれの松があつて、人家がまたつづき、灯が連なつて明るのだが、こっちは外灯ともない真つ暗闇で、夜は通行人が

ほとんど絶えていた。だが、思案するにはこういう道を選んだほうがいいのだ。

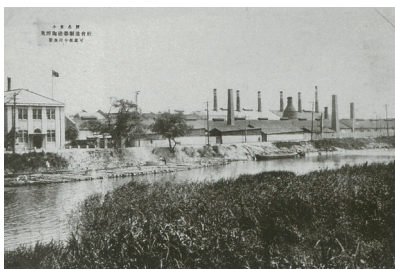
(文藝春秋 松本清張全集39「表象詩人」)

作品に登場する陶器会社は、日本を代表する水まわり総合メーカーのTOTOである。現在も紫川の東側の敷地に本社や工場、ミュージアムを構えている。

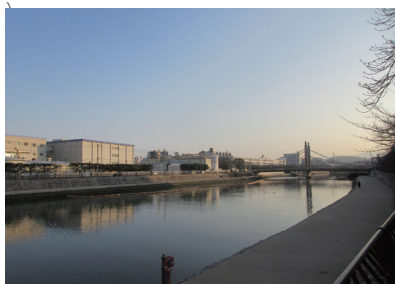
TOTOは衛生陶器の国産化、工業化のため、大正六年に東洋陶器株式会社として創業。原料や燃料の石炭が入手しやすく、また製品を門司港から輸出する際、船での運搬が可能な土地として小倉が選ばれた。当時は下水道がほとんど整備されておらず、また、衛生概念も定着していなかったため、食器の製造で経営を支えていたそうである。

紫川沿いは現在、人々が水辺で楽しめるよう配慮された護岸が整備されている。兵器工廠跡や松の木はもうなくなっているが、桜の木が植樹されている。特にTOTOT側(東側の道路は「紫川さくら通り」と名付けられ、春には目を楽しませてくれる。

(村上美智代)



昭和初期の紫川と東洋陶器(「北九州思い出写真館」から)



現在の紫川とTOTOT

第22回

松本清張研究奨励事業入選企画

企画名 小説に描かれた考古学世界の理想と現実—松本清張と以後の小説—

入選者 絹島 歩 (奈良県立橿原考古学研究所主任研究員)

企画名 韓国における社会派推理小説の受容とその変容—松本清張と森村誠一を中心に

入選者 安慧娟 (韓国成均館大学)

清張が描いた考古学作品の変化と背景を明らかにし、考古学と大衆文化の関係に迫る研究と、韓国での社会派推理小説の受容過程を論評や広告等の分析を通して明らかにする研究で共に成果が期待されます。

友の会 活動報告

● 清張サロン

清張作品や清張に関する話題をテーマに講演や意見交換を行う清張サロン。昨年10月の清張サロンでは、開催中の企画展「直筆原稿で見る—『点と線』のダイナミズム」について、柳原孝子氏が講演を行いました。

松本清張の推理小説家としての地位を確立した代表作「点と線」の直筆原稿を展示替えを行いながら所蔵する全てを展示するというコンセプトや、「点と線」が当時の出版界や読者に与えたインパクトについて解説しました。

日 時:令和2年10月8日(木) 14:00~15:30

会 場:松本清張記念館 地階 オープンスペース

テーマ:直筆原稿で見る—「点と線」のダイナミズム

講 師:柳原孝子学芸員 (参加者24名)



● 生誕祭

日 時:令和2年12月19日(土) 14:30~16:30

会 場:北九州市立生涯学習総合センター 3階ホール

松本清張の111回目の誕生日を、友の会会員でお祝いする「生誕祭」を開催しました。北九州市内外で幅広く活躍しているバイオリニストの尾崎めぐみさんによるミニコンサートと文藝春秋文藝出版局第一文芸部部長の田中光子さんによる講演会を行いました。講演では、松本清張担当編集者としてヨーロッパへの取材旅行に同行した時のお話やその取材の成果が短編集『草の径』に結実したことなど、間近に接してきた田中さんならではの貴重な話をうかがうことができました。



バイオリニスト
尾崎めぐみさん

文藝春秋第一文芸部部長 田中光子さん

● 劇団前進座朗読劇「^{れんじょう}恋情」

春の恒例事業となっている劇団前進座朗読劇は、コロナ禍のため秋の実施となりました。17回目となる今回の演目は「恋情」でした。明治時代を舞台に、小さな藩主の跡取りと本家の娘との切なくも数奇な運命を描いた小説です。「前進座の皆さんの熱演と脚本に感動、感嘆しました」、「「待つ」ことの美しさ、ひたむきさに惹かれました」などの感想が寄せられました。

日 時:令和2年10月17日(土) 19:00~20:20(参加者55名)

会 場:松本清張記念館 屋外特設スタンド



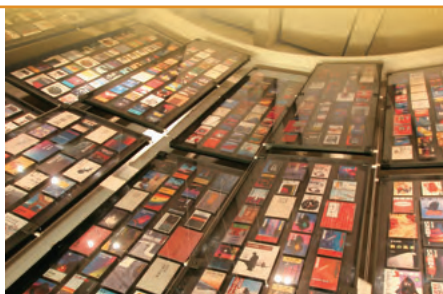
● 友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集 ●

松本清張記念館友の会は8月1日~翌7月31日を1年度として、文学散歩や清張サロン、講演会、生誕祭、「友の会だより」の発行、記念館に関する情報提供など多彩な事業を展開しています。

年会費は3,000円です。皆様のご入会を心よりお待ちしております。

友の会入会のお申込は、
松本清張記念館友の会事務局まで

TEL.093-582-2761



令和3年度
中学生・高校生

読書感想文コンクール

若年層に清張作品に親しんでもらうとともに、表現力を学び、豊かな心を育む契機となればという思いから始めました。
新時代を切り開く若者達へ、探求の人・松本清張の精神の伝達を働きかけるものです。

■ 応募対象 全国の中学生・高校生

■ 課題図書 中学生・高校生ともに下記から1作品

「球形の荒野」(『球形の荒野』上・下 文春文庫)

「高校殺人事件」(『高校殺人事件』光文社文庫)

「恋情」(『西郷札』新潮文庫)

■ 応募方法

○中学生、高校生ともに1200～2000字程度の読書感想文を書き、応募用紙に添えて提出してください。

○手書き、ワープロどちらでも結構です。ただし全体の字数がわかるように応募用紙に1行の字数×行数を記入してください。

○原稿は自作で未発表のものに限ります。なお応募原稿はお返しいたしませんので必要なのはコピーをおとりください。

■ 応募締切 令和3年9月30日(木) ※当日消印有効

■ 選考 松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

■ 発表

最優秀賞、優秀賞の受賞者には、11月中旬頃、本人と学校に通知し後日表彰式を行います。なお、入選の結果は、当館発行の「館報」で発表する予定です。その場合、著作権は松本清張記念館に帰属します。

■ 賞 (受賞人数等変更の場合もあります。)

○最優秀賞(1人)

○優秀賞(中学の部…1人)(高校の部…1人)

○佳作(中学の部…3人)(高校の部…3人)

※なお、最優秀賞は中学の部、高校の部で各1回ずつの受賞と限らせていただきます。最優秀賞受賞後の応募も歓迎します。すでに受賞した人からの応募作品が賞に該当する場合は「特別賞」として当館発行の「館報」掲載を予定しています。

応募先
問い合わせ

〒803-0813 北九州市小倉北区城内2番3号 松本清張記念館 読書感想文コンクール係
TEL 093-582-2761 FAX 093-562-2303

※応募用紙は記念館HPからダウンロードできます。

講演に行ってきました

日付	主催者・会場等
7/14	北九州市立大学
11/13	小倉南図書館
11/20	泉台市民センター
1/13	北九州市観光案内ボランティア小倉地区会勉強会
1/22	北九州市立年長者研修大学校六生学舎研修
1/27	赤坂市民センター
2/5	北九州市立年長者研修大学校六生学舎研修

●編集後記● 北九州市では12月まで「東アジア文化都市北九州」が開催されています。当館においても清張と東アジアに注目した企画展の秋季開催に向けて準備を進めています。2010年に開催した企画展「松本清張と東アジアー描かれた〈東アジア・東南アジア〉読まれる〈清張〉」の続編として、近年の韓国と中国での清張作品の読まれ方や清張が歩いた東アジアの風景を紹介したいと思います。ご期待ください。

(M.M)



イラスト:山藤 章二

編集・発行 松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL 093(582)2761
FAX 093(562)2303
https://www.seicho-mm.jp
制作 有限会社スーズ

- 開館時間 午前9:30～午後6:00(入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)、館内整理日
- 観覧料 一般/600円(480円) 中・高生/360円(280円)
小学生/240円(190円) ()は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
小倉からはバスをご利用いただくと便利です(小倉城・松本清張記念館下車)
車: 北九州市高速、大手町ランプより5分

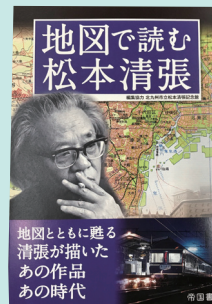
ミュージアムショップからのお知らせ

『地図で読む松本清張』

【編集協力:松本清張記念館】

『松本清張地図帖』の発行元・帝国書院から、「地図帖」を大幅に加筆、内容・装丁とも一新した『地図で読む松本清張』が発行されました。版型もA5版とコンパクトになっています。

ミュージアムショップでも発売中です。



■『地図で読む松本清張』
(帝国書院) 1,800円(税別)

